

菅又厚美作 「あこがれ — 麻里子の場合」

杉野麻里子 (モノローグ)(本を音読)「名声や恋や学問より尊く、うれしかったのは、友情だった。優しさというものは、相手からの報酬のために与えるものではなくて、相手の心に心が寄り添い、触れ合うものである。また、愛は欲しがるものではなく、与えるものだ。」——ふーん、ヘッセって、きれいなこと言うのね。

川村京子 何ブツブツ言ってるの？

麻里子 え？ ああ、京子。ヘッセの「春の嵐^{あらし}」って本借りたからね、今読んでたところなの。

京子 へー、麻里子も本とか読むのねえ。

麻里子 あら、失礼じゃないの。

京子 ごめん ごめん。いつも雑誌とか漫画ばかりだから、つい、ね。

麻里子 でもさあ、京子だったらどう？

京子 何が？

麻里子 “愛ってものは、どんなものか”ってことよ。

京子 “愛”ね…。一番偉大なものじゃないかなあ。

麻里子 偉大…。

京子 うん。「愛は寛容であり、親切である。自慢せず、自分の利益を求めず、すべてを信じ、期待し、耐え忍ぶもの」じゃないかな。

麻里子 ふーん、“愛は寛容”…か。京子、それ、聖書の中にある言葉？

京子 うん。どうして？

麻里子 だって、京子っていつもさりげなく、神様はこう言ってるとか、話すじゃない？ 今のもいい言葉でしょ？ だからなんとなくそうじゃないかなと思って。

京子 麻里子、鋭い！ 当たり！

ナレーション 川村京子と杉野麻里子は青春中学 3 年生。中学 1 年からの親友同士。麻里子は、1 年の時から、京子の落ち着いた態度や、人に対する心遣いに、あこがれていたのです。京子は、中学に入学したばかりの時に、クリスチャンになったのです。

京子 ねえ、麻里子は中学卒業したら、どうするつもりでいるの？

麻里子 うーん。全然そんなの分からない。だって、みんな高校行くんでしょ？ わたしも同じよ、たぶん。

京子 高校はなんのために行くの？

麻里子 えー？ 分かんない。

京子 目標ってある？

麻里子 京子、ヘンね。先生たちや親みたい。次々に言われても分かんないもん。目標

はあるわよ、一応。京子みたいに、大人っぽくて、しっかり者になるの！

京子 高校に行って、わたしのようにするために勉強するの？

麻里子 ヤだなあ。違うよ。

京子 「麻里子は一体何になりたいの？」って聞いているのに。

麻里子 何に？ 考えてないよ。京子はどうなの？ 何か考えてる？

京子 わたしは学校の先生になりたいと思ってるの。ホームルームの時間に、イエス様のことを生徒たちに話したいんだあ。

麻里子 へー。

京子 一種の“あこがれ”かな。英語の先生っていうの、ちょっとカッコいいしね。「グッドモーニング エブリバディー。ハウアーユー トゥデー？」な一んちゃって。

麻里子 いいじゃん いいじゃん！ 京子なら頭いいし、なれるよ、きっと。

京子 ありがとう。でも、麻里子も、わたしのことばかりじゃなく、自分のこと見つめ直さなくちゃね。

麻里子 うん。

ナレーション とは言ったものの、いまだに麻里子の心の中には、何を目的にしてよいのかはつきりせず、漠然としたあこがれだけが心の中をうずめるのでした。そんなある日――。

(効果音) (教室のガヤ)

藤田先生 そろそろ新しい学年にも慣れてきただろう。そこで、ちょっと早いけど、もう準備にかかってもおかしくないのが、受験勉強だ。学校側でも、特別問題集などを先生方で作ったりもしている。欲しい者は、あとで職員室へ相談に来るように。A、B、Cと3つにランク分けしてある。以上。

(効果音) (教室のガヤ)

男子A おい、ランク分けってことは、やっぱり、おれらじゃCの問題集かなあ。

男子B だろうな。

麻里子 京子、問題集もらう？

京子 そうだね。欲しいな。

麻里子 じゃあ、わたし、職員室に用事あるから、先生に言って、もらってきてあげる。

京子 ああ、ありがとう。

(効果音) (教員室のドア)

麻里子 藤田先生、問題集を1冊頂きたいんですけど。

藤田先生 ああ、お前か。えっと、はい、これだ。

麻里子 ありがとうございます。…あれ、Cですか？

藤田先生 そうだ。ランク別だと言ったろう？

麻里子 京子、いえ、川村さんのですよ。わたしが代わりに取りに来たんです。

先生 あ、川村のか。じゃあAの問題集じゃなくちゃな。

麻里子 先生…。
藤田先生 早く渡してあげなさい。
麻里子 はい。
(麻里子、教室に戻り——)
麻里子 はい、京子。
京子 ありがとう。あ、A じゃない！ 麻里子、こんな難しいのもらってくるなんて、困るよ。
麻里子 先生がそれをくれたのよ、川村用として。
京子 そうなの。じゃあ、しっかりやらなくちゃね。麻里子ももらってきたんでしょ？ 一緒にやろうよ。
麻里子 京子。クリスチャンだかなんだかよく知らないけど、それは嫌味？
京子 麻里子…。
麻里子 そりゃ、わたしは、わたしはバカかもしれない。だけど、先生や、京子までそんなふうになんか見てたなんて全然知らなかった。
京子 ちょっと、麻里子。どうしたのよ？
麻里子 京子は、優しく、頭もよくて、すてきだし、なんだってできるよ。わたし、そんな京子、大好きだよ。自分のこと自慢しないし、本当にあこがれてるよ、悔しいくらい。
京子 麻里子！ 急にヘンよ。何かあったの？
麻里子 わたしが京子の代わりに問題集取りに行ったら、C のほうを渡したわ。京子、頭いいから、“Cはちょっとなあ”と思ったから、先生に言ったら、急に「川村ならAだな」って。わたしはC、京子は A。そんなことは分かっている。でも、あの態度を見て、自分がものすごく惨めになった。そんなとき、京子ってば、「一緒にやろう」だなんて言うから、頭、完全に爆発しちゃって。…聞いている？
京子 (優しく)聞いているよ。
麻里子 ……。
京子 それから、なあに？
麻里子 京子、わたし、今ひどいことを言ったよ。怒ってないの？
京子 ひどいこと？ ひどいことないわよ。麻里子は今、ありのままの自分をわたしにぶつけてくれた。最初は驚いたけど。麻里子は、前々から少し自分の存在に劣等感を感じていたんじゃないかなあ。
麻里子 劣等感…。
京子 そう。麻里子は、普段はマイペースで、ゆったりとしてるんだけど、本当は傷つきやすいのよねえ。だから、ちょっとした出来事で、ムカツと来たんだと思う。
麻里子 ……。
京子 先生が、わたしと麻里子のこと比べた。そして、わたしのほうを上にした。麻里

子の心の隅に、わたしへのあこがれと同時に、劣等感もあった。うーん、あこがれがあるからこそ、劣等感も生まれてくるんだろうけど、タフなふりしてる半面、否定的な部分って、自分で作り上げちゃうものなのね。わたしも同じ。わたしは時々、“自分は勉強が得意だから”と、人を見下して優越感に浸ってるの。そんな状態のときに、ちょっと失敗したりするとグサッと来るのよ。

麻里子 京子…。

京子 ねえ、麻里子。これをきっかけにわたしの行ってる教会へ行ってみない？ 案内するわよ。教会の人たちからも話を聞かせてもらったり…。

麻里子 うん。

京子 じゃあ、またね。詳しくは土曜日にね。バイバイ。

麻里子(モノローグ) 京子、なんだかわたし、今すごくひねくれてる。京子も同じだなんて、ちょっと安心もしたけど、そのあと、いきなり「教会へ行こう」だなんて、ちょっとムシがいいような気がする。それに、京子は、クリスチャンなのに人のこと悪く思ったりもするんだ。そんな京子の言うことなんて…。あ、こうやって京子のこと批判してるわたしはどうなの？ どっちが悪いのよ？ ううん、どっちがいい悪いとか、そういう問題じゃない。ああ、もう分かんない、全然。

京子(回想) (エコー)麻里子、感謝しなくちゃ。分からなくなってしまったとき、神様に祈るのよ。力を貸していただきましょう。困難さえも喜ぼうよ。神様は、耐え忍ぶってことを教えようとしているのよ。

麻里子(モノローグ) 京子…。そう、京子は以前、そう教えてくれた。そうだ、祈ってみよう。神様、助けてください。わたしは、とにかく今の自分が嫌いです。逃げたい気分です。

ダメだわ、こんなの苦しいときの神頼みよ。京子、どうしよう。

ナレーション 優しい京子へのあこがれに、突然泥足で踏み込んできたような、自分でも説明のつかないイラ立ちに、麻里子は眠れぬ一夜を過ごしたのです。次の日――。

麻里子 京子、おはよ。

京子 あ、おはよう。

麻里子 わたし、まだ昨日のこと…。もうね、問題集が A だろうが C だろうが、気にならないわ。でも心の中に、まだちょっとしたこだわりがあるの。京子がいつも話してた神様に、祈ってもみたわ。でも答えてくれなかった。

京子 神様は、その時にかなった力を与えてくれる。「お願いします。「はい、どうぞ。」ってわけじゃないのよ。小さな種を埋める穴を掘るのに、ブルドーザーは貸してくれない。シャベルを貸してくださるのよ。でも、あきらめないで、求めていって必要だと思うな。今麻里子が苦しんでること、わたしなんか、イエス様信じてからも何度も何度も味わったもの。でも、そのたんびに「神様、助け

て！」って求めているうちに、自分の中のイヤなところが少しずつ、少しずつ変えられてきたみたい。わたし、麻里子のために祈ってたわ。

麻里子 わたしのため？

京子 ずっと昔からの友達じゃない。親友じゃない。その麻里子のために祈るのは当たり前よ。

麻里子 京子…。

京子 麻里子、わたしのことあこがれてたって言うけど、わたしだって、真理子の明るいところ、すごくあこがれていたのよ。でも、そんな麻里子だって、苦しく、悲しい時だってあったんだろうなあって。だからこそ、一日も早くイエス様信じてほしいって。

麻里子 京子、ごめん…。

京子 麻里子、どうして謝るの？

麻里子 だって、だって…。(泣く)わたし、京子のこと好きなのに、“京子ってば、わたしのこといつもバカだと思ってるんじゃないか”とか、そんなことばかり思って。頭暴発した時の、あの京子の話も、皮肉に取ったりして。なのに、京子、わたしの、わたしのこと、神様に…。

京子 神様は、麻里子が生まれる前から、麻里子のご存じなのよ。見守っていてくださるの。

麻里子 うん。

京子 だからこそ、イエス様にすがろうよ。麻里子、暴発状態の時でも、祈ったんでしょ？ その心、忘れないで。

ナレーション 麻里子は、涙でクシャクシャになりながら、ひたむきに友を思う京子の顔を見つめました。そして今、自分の心の中で、彼女へのあこがれが、はっきりとした一つの思い——“京子と同じきれいな心を持ちたい”という願いに変わっていくのを、麻里子は感じ取っていたのでした。

<完>